

キタキツネのキキ

5

作 なかむら よしひろ

てそうぞうができませんでした。ふしぎそうな顔をしていると、トトが言いました。

「俺についてきな、えものとり方を教えてやるから」

キキはあまり遠くに行くとは帰れなくなってしまうかも知れないと心配でしたが、トトにさからったら叱られそうなのでしぶしぶついて行きました。

しばらく歩いたところでトトが立ち止まり体を小さくし、ささやき声で言いました。

「あその木のかぶの横に小さな穴があるだろう、あれがエゾヤチネズミの巣だ。そのうちあそこからネズミが飛び出してくるからそれをつかまえるんだ。さあ、やってみな」そう言いながらキキを自分の前におし出しました。

「どうして、人間から食べものをもらうと死んじゃうの」
「当たり前だ。キツネにはな、キツネの食べものがあるんだ。去年おれと同じころに生まれたキツネのなかにも人間から食べものをもらうやつがいたけど、みんな年をこす前に死んじゃった」トトはキキより一つ年上だったのですね、どつりで大きいわけです。
「どうして、人間から食べものをもらうと死んじゃうの」
「それはな、自分でえものをとらなくなるからだよ」
「自分でとらなくても人がくれるよ」
「それは夏の間か、せいぜい秋までだ。冬になったらだれもこんなところに来やしない」
キキは冬がどんなものか知らなかったし、人が来なくなることなら

キキはわけがわからないまましゃがみ込んでその穴をじっと見つめていました。10分もそのかっこうで待つていたでしようか、なにも出てこないのたいくつし、あくびが出そうになりました。その時です、その小さな穴から何か黒いかたまりが飛び出してキキの目の前を走って行きました。キキはおどろいてその場で飛び上がってしまいました。もちろんその小さな黒いかたまりはとっ

くに行ってしまったてかげも形もみえません。

「なにをおどろいてるんだ、せつかくチャンスだったのによ」とトト。「だって、いきなり変なのが出てきたのでおどろいちゃった、なに、あれ」

「なにつて、あれがヤチネズミだよ、ごちそうだったのによ。まあいいや、じきにあいっは帰ってくる、今度はおれ様がやるからお前は後ろで見てな」そう言うとトトは体を小さくし身をつき一つしません。キキもそれにならつてしやがみ込みました。10分ほどたちましたがなにもおこりません。キキはまちくたびれて家に帰ろうと思いました。それで、

「ねえ、トト」と声をかけたのですが、トトは「シーッ」と言うだけです。キキはなぜこんな所に来ちゃったのかなあ、あのままおうちに帰れば良かったなあ、お母さんがぎつと心配しているだろうなああと考えていた時です、クマザサの葉がかすかに音をたてました。そのしゅんかんトトが飛び上がりました。目にもとまらぬ早わざとはこのことです。ふり返ったトトの口にはさっきの黒いかたまり、エゾヤチネズミがすっかりとくわえられていました。

「モグモグ・・・」トトがなにか言っていますが大きなネズミをくわえているのでなにを言っているのかはつきり分かりません。でもそぶりからはついて来いと云っているようです。キキはおうちに帰りたいたかつたのですが、トトがそのネズミをどうするかにもきょうみがあつたのでついていくことにしました。

山道になれていないキキがトトについていくのは大変でした。キキが遅れそうになると、トトは少し歩くのをおそくしてキキの来るのを待つてくれました。トトは言葉は悪いけれどあんがい親切です。やがて1本の太いカラマツのねもとの、クマザサがひとときわ茂つた場所に来ました。トトがその茂みにもぐり込んだのでキキも後を追つたのですが、どこに消えたのかトトの姿がありません。キキがぼかんとしているとき「モグ、モグ・・・」とトトの声がします。よくみるとクマザサの葉でうまくかくされた穴がありました。そこがトトのおうちでした。
(2月号へつづく)

